

日本鍼灸学への視座 〈伝統医療〉に還れ

鍼灸ジャーナリスト
松田 博公

日本の鍼灸医療が、研究や臨床面、さらに普及面で突き当たっている壁をひと言で突破できる、魔法の呪文について、風呂敷を広げてみようと思う。そんなものあるわけがない、そんなオールマイティなおまじないがあれば苦労しないと、だれもが言うだろう。それはあるのではないかとわたしは考えている。その言葉は、アカデミックで機能的な思考に慣れた最近の鍼灸人には、古めかしくてほこりをかぶり、みすばらしくさえ思えるので、目に入らなくなってしまっただけなのである。

その呪文は、〈伝統医療〉という短い熟語である。お好みならもう少し長くして、〈鍼灸は、アジアの伝統医療である〉と唱えてもよい。そうすれば、われわれが逢着している研究面、臨床面、そして普及、定着面での諸々の課題は、霧がはれたように解決の展望を得ることができるだろう。この呪文の助けを借りないで、制度や教育、啓蒙作戦をどう組み替えたところで、目先の矛盾の辻褄合わせにしかならない。社会鍼灸学研究会で語られる新しい観点や意欲的な提言が相互にかみ合い高い次元で実を結ぶためにも、〈伝統医療〉観が共通の孵卵器として踏まえらるべきだと、語りたいのである。

この10年、鍼灸の世界的な潮流は、もっぱら代替医療の動向が牽引してきた。そこで強調されたのは、鍼灸の技術的効果や経済効率の側面である。けれど、真に必要なのは、代替医療よりも、〈伝統医療〉について考えることであり、その可能性を賦活することではないか。鍼灸は代替医療であるという位置づけからは、せいぜい現代医療の破綻の補完という展望しか出てこないが、〈鍼灸は伝統医療である〉と捉えるなら、射程は、人間の幸福のかたちにまで届くからである。

日本は伝統主義でも合理主義でもない

日本について考えるとき、日本は変な国だということを忘れないほうがよい。鍼灸についても、そうである。アジアで科学的エビデンスがなければ鍼灸は社会に認知されないと考える人々が発言力を持ち、研究費など資源の配分がそちらに傾いている国は、日本だけである。中国にも、韓国にも、ベトナムにも、台湾にもそう考える人々はあるが、それらの国や地域で鍼灸が認知されているのは、エビデンス論議とは関係がない。〈伝統医療〉だから支持されているのである。タイやカンボジア、ミャンマー、モンゴル、チベット、インドでも同様である。それらの国々では、土着の〈伝統医療〉が保護、尊重されていて、その延長に鍼灸も受け入れられている。

アジアは、〈伝統医療〉を、民族、国家の文化的アイデンティティから認知する伝統主義である。欧米は、エビデンスがあれば、その医療を認知する合理主義である。日本は奇妙なことに、伝統主義でも合理主義でもない。〈伝統医療〉を保護育成する政策はないし、エビデンスがあれば正統医療に組み込むという政策もない。医薬品産業と結びついた官僚制と医師業団による防壁は厚く、エビデンスと政治的決定との間の溝は極めて深い。この国でエビデンスを積み重ね、政策的認知を獲得しようとする欧米的方法是、ほとんど時間とエネルギーの浪費だが、鍼灸業界、学会の努力はその方向に偏っている。〈伝

統医療としての鍼灸)を、民族、国家の文化の核心として保護育成させ、海外に発信させようとする気構えは乏しい。これが変な国の鍼灸業界、学会の変な現状である。

〈鍼灸は伝統医療〉という認識の希薄さ

〈伝統医療としての鍼灸〉という視点の希薄さは、日本の鍼灸術の思想とわざの伝承システムに大きな影を落としている。中国や韓国においては、〈鍼灸は祖国の伝統医療〉なので、中医薬大学や韓医大学では、鍼灸医療を生み出し育ててきた古代の文化、哲学、科学、歴史を基礎に据え、その上に技術的なものや現代医学的なものを学ぶ教育課程になっている。導引按蹻や気功、食養生などについて学ぶのも、宗教的修行を含めさまざまな癒しのわざが融合する〈伝統医療〉の性格が理解されているからである。

日本の鍼灸大学や専門学校の学習内容の欠陥を指摘されると、文科省の規制や学生の質が弁明として語られるが、問題はそれだけだろうか。〈鍼灸は伝統医療〉という認識があれば、中国古代鍼灸の形成史、日本に輸入したあとの鍼灸学術史、さらに日本鍼灸の背景となる民俗論、宗教論、日本文化論などは、必須の学習対象になる。文科省の無理解や学生のレベルが、それらの講座の設置を阻むなら、関係者は深刻に悩み、なんとかして実現したいと願うだろう。しかし、深く悩んでいる人が多いようには見えない。

いや、われわれは山田慶児氏らがつとに指摘してきたように、理論嫌悪で実利主義の民族だから、そんな鍼灸思想の歴史なんてどうでもいい、現在ただ今効くわざが大事だ、と言うひともいるかもしれない。確かに、鍼灸のわざは、日本列島において成熟を遂げてきた。鍼は細くなり、灸の温熱は繊細になった。打鍼が生まれ、管鍼法も開発された。大浦慈観氏が研究している杉山真伝流の鍼術のような多彩な手技も発達した。そして、小児鍼や灸頭鍼も生まれた。鍼も灸も、刺せばよい、燃やせばよいというレベルを超えた、繊細な技術の世界を繰り広げてきた。だとすれば、柳谷素霊の口まねをして、それら日本鍼灸の豊かな達成は、いまどこに保存され継承されているか、今後はどうかと問わなければならない。

ディスプレイ鍼がもたらしたもの

いま、大学や専門学校における鍼灸のわざのレベルは、どうだろうか。鍼は刺せば効くという誤った観念や灸は患者が好まないからしないという姿勢を学生に植えつける教育が行われてはいないか。戦後の科学的鍼灸や電気鍼の導入が、その技術的成果は別に、手技や気の操作抜きの鍼灸観を定着させるのに役立ち、さらに、ディスプレイ鍼の普及が追い打ちをかけている。

15年ぐらい前までは、鍼といえば銀鍼だった。この曲がりやすく刺入しにくい手作りの鍼を通して、日本の鍼灸師は〈伝統医療としての鍼灸〉につながっていた。鍼灸界に足を踏み入れた学生は、最初に鍼灸師以外に鍼師という手作り職人がいることを知る。神戸源蔵は、鍼灸名人と並ぶもうひとりの名人として尊敬を集め、神戸の鍼を手にするとき、遠く江戸期を遡る鍼灸の職人の系譜に自らが繋がっているという自覚を持っていたのである。

ぬか袋から始まる銀鍼の修練は、堅物通し、浮き物通し、生き物通しへと至る。やがて人体に刺すがおいそれとは入らない。それを念じて、やっと入ったら、つかえてしまう。このようにして鍼はどうして皮膚に入るか、入った鍼はどう進むか、硬結に遭遇したら鍼はどうなるか、どうすれば硬結は緩むか、次々に想念が巡り、工夫が始まる。そうした経過をたどりつつ気感が高まり、気至るの感覚を知り、手技に応じて患者さんのからだに変化することが分かってくる。鍼は刺せば効くものではない。患者さんの病態や硬結の状態などに合わせて的確な手技を施し、意念も含めて患者さんと交流できたとき、鍼は効くのだと実感できてくる。初心者でも、少し大胆さがあり数時間練習すれば、容易に刺入できるディスプレイ鍼の登場は、鍼の手作り職人の文化とともに、鍼修業のこの過程を消滅させてしまった。

デスポーザブル鍼にどんな利点があろうとも、そのことは忘れるべきではない。

生命の思想と絶滅の思想

デスポーザブル鍼の開発は、暴力思想によって支えられている。こう言うと、意外な感じがするかもしれない。それが、〈伝統医療〉の生命観とは対極的な思想の産物であることを強調したくて、あえてそう言おう。〈伝統医療〉の典型的な故郷は、無数の生命が織りなす、昼なお暗い森林のじめじめした環境である。天地、日月、風雨、星の運行、火、水、鉱物、虫、カビ、細菌、酵母、植物、動物、死者、生者などが絡み合う濃密な生命の宇宙が、薬となり、魂を賦活し、自ずからなる治癒力を与え、わたしたちを生かしてくれる。この生命宇宙の法則は、諸々の生命、非生命の混沌とした共生とバランスであり、細菌にもウイルスにも存在価値があり、悪も排除しない。老いて死期がくれば、ウジ虫や細菌やウイルスに食べられることを許すのが、〈伝統医療〉の死生観である。鍼灸はなぜ効くのか、まだ未解明の理由のひとつは、鍼灸が皮膚に働きかけるとき、そこに存在する細菌やウイルスが免疫作用や抗原抗体反応を引き出しているからかもしれない。

対するデスポーザブル鍼の根拠は、煎じ詰めれば滅菌の思想である。一切の細菌やウイルスの存在を許さない絶滅の思想である。このような近代的感觉がもたらした清潔志向が生体の生態系や心身のバランスを破壊し、アレルギーやうつやさまざまな文明病の原因になっていることは、周知の事実である。WHO官僚など、西洋医学畑の人々が、世界鍼灸の覇権を狙う中医学官僚と手を結んで、鍼灸無菌化作戦を推進するのは、分からないではない。それは、彼らの思想だから。けれど、湿潤な照葉樹林帯に暮らし、味噌、醤油、酒、乾物などの発酵食品を発達させ、カビや細菌と共生し、アニミズムや神仏混淆などの自然信仰の遺産を引き継ぐわが国で鍼灸医療に従事するひとたちが、易々と〈伝統医療〉の生命感覚を忘却し、衛生・消毒思想のマジックに引っかかってしまうのはなぜなのか。それが、日本鍼灸のわざの消滅につながるとなれば、単なる現代医療への迎合や事大主義、無国籍化と、笑って済ますわけにはいかない。

グローバルスタンダードに従う前に

確かに、かつての伝統鍼灸の時代には、消毒観念の欠如から鍼の使い回しも行われ、鍼施術が肝炎などの感染症を媒介したことがあっただろう。そのような事例は、20年前までも見られたかもしれない。避けられる危害が避けられねばならないのは当然だ。けれど、社会がある技術を受容するとき、そのリスクをどこまで負担すべきかは、一義的に決定されているわけではない。その時々、社会的合意と政治的決定のもとづくのである。100パーセント安全な技術など存在しない。例えば、交通手段として自動車を選択した日本社会は、年間、数万人の死傷者を容認している。死傷者が出るから自動車をやめようと、運転しないわたしは言いたい、運転する皆さんは言わないだろう。毎年、3万人以上の自殺者を生み出す現在の日本の社会システムは、間違っているが、それは社会システム自体をなくすことでは解決しない。

何よりも現代医療がそうである。医療事故や医原病で、全世界で毎年、数百万人の犠牲者が出ている。現代医療に対する怒りは高まり、それが代替医療、〈伝統医療〉シフトを促進させているが、だからといって、現代医療そのものをやめようと主張するひとはまれだろう。数百万人の犠牲者を我慢してでも、現代医療の恩恵を享受したいという社会的合意があるとみなす政治的決定がなされている。鍼灸においても、そういう手続きは可能ではないか。

全世界で年間に若干の感染症の患者が出るかもしれないが、衛生・消毒を厳格にし過ぎると、わざに支障をきたし、効果に悪影響をもたらすので、一律的なジェノサイド（民族絶滅政策）的消毒法は押しつけない。消毒法は、各国、地域の鍼灸手技と深く絡むので、それぞれの事情に従って決めればよい、と。

われわれは根拠のあいまいな衛生・消毒法に強迫神経症のように従うのではなく、臨床の事実と〈伝統医療の生命観〉に合致した消毒法を選択する、と。鍼灸においてもグローバリゼーションは問題を孕んでいる。鍼灸はローカルな風土の医療であり、その意味からも〈伝統医療〉である。わたしたちは、リスク管理のグローバルスタンダードに唯々諾々と従う前に、〈伝統医療〉の側からの反論を試みるべきだろう。

(注) 外国人鍼灸師は、われわれより衛生志向が強いという先入観を壊してくれるのが、『鍼灸ジャーナル』No.5 (2008年11月号) の座談会「なぜ時速80kmでも安全な所で、40kmを強制するのか」である。彼らも、衛生法の押しつけは民主的ではないと感じている。

一時代の消毒法が数千年のわざを変える

WHO推奨の衛生・消毒法は、ディスポーザブル鍼にとどまらず、指サックやグローブの着用に及び、それを実施する教育施設が次第に増えている。からだの冷え切った患者さんの皮膚をアルコール綿で一拭きした場合、どんな影響があるか、日本の伝統派の鍼灸家が行ってきた衛生・消毒法は果たしてどれだけ危険なのかなど、基礎的調査さえなく、西洋医学の帝国主義的衛生法が驕進している。考慮されているのは、鍼灸治療の全体ではなく、消毒のことだけだ。想定されている鍼灸術は、押手も刺手も患者さんのからだや鍼体に触れることなく施術できる現代中医鍼灸である。それによって、日本鍼灸のわざがどんな影響を被るかは、WHO官僚や中医学官僚の関心の外にある。

言うまでもなく、日本鍼灸は流派を超えて、患者さんのからだに丹念に触れて経脈やツボを探ることを特色にしている。手を通した親密な診断、対話こそが、日本鍼灸に宿る〈伝統医療〉の要素である。診断と施術とは同一の過程であり、すみやかに連続していなければならない。裸の手指でツボを確認し、そのあとに手指を消毒し、グローブやサックをはめて刺鍼するなどというまるでこしい手順は、本来の日本鍼灸にはあり得ない。いや、ことは日本鍼灸だけにとどまらない。グローブやサックをはめれば、手技をしつつ「気至る」を確認することはできないし、気を送ることもできない。それができないということは、『素問』『靈樞』以降の中国の古典的手技ができないということでもある。このことから、中医鍼灸(TCM)が、現代中国の特殊な社会・政治状況の産物であり、伝統的鍼灸とは異なる鍼灸の現代的変容であることが分かる。

たくさんの方のことを議論しないまま、それがグローバルスタンダードだ、WHO消毒法を受け入れなければ、日本は世界の孤児になってしまう、とパニックになっている人々は、鍼灸術とは何か、その起源や歴史の重要性について考えたことがないのだろうか。それだけでなく、細菌やウイルスに関する知識は、いま進展している「進化医学(ダーウィン医学)」などの成果によって変わるかもしれない。細菌やウイルスが人間の健康や治療にとって果たす役割が、もっと分かれば、現代医療の消毒観も、手術など特別な場合は除いて、柔軟になり、場合に応じて使い分けられるようになる可能性は大きい。だとすれば、過渡的な、一時代の衛生・消毒法が、数千年の鍼灸術のわざの蓄積、伝統を解体してしまっているのか。〈伝統文化としての鍼灸〉を保護しなくていいのか。何よりも、鍼灸のわざが変質したとき、鍼灸の効果は維持できるのか。いま、グローブや指サックを推進している人々は、そのような真摯で深刻なおののきを感じるべきだろう。

日本鍼灸のわざは、鍼灸グローバル化の渦中において、WHO=中医学の衛生・消毒法に飲み込まれ、消滅する運命なのだろうか。衛生法の網の目をなし崩しに、曖昧にかいくぐることは次第に難しくなっている。鍼灸大学や専門学校では、どんどんWHO=中医学の衛生観念が浸透している。それは、上に述べたように、混沌とした生命の共生感覚が成り立たせる〈伝統医療の一翼としての鍼灸医療〉とは無縁な思想である。そのようなジェノサイド的衛生思想のもとでは、そのような無機的、非生命的鍼灸しかできない。患者さんは大事にしよう、けれど細菌やウイルスは絶滅させよう。この言い方が、どれほ

どブラック・ユーモアなのか理解できないほど、わたしたちは傲慢になっている。

〈伝統医療としての鍼灸〉に還れという呪文は、ここでも効果があると思うのである。

(注) 指サックを使用している鍼灸師の意見は、『医道の日本』2009年4月号の座談会「『指サック押手』を考える」(司会・山下仁)を参照。

〈開放系の医療〉と〈閉鎖系の医療〉

〈伝統医療〉は、〈開放系の医療〉と言い換えることができる。対概念は、〈閉鎖系の医療〉である。〈閉鎖系の医療〉においては、個人は皮膚に閉じ込められた孤立した袋であり、そのように把握した生物学的の身体に向けて技術的な医療を施す。〈開放系の医療〉においては、個人は他者や地域、共同体、自然、宇宙に開かれ、希求し交流し感応するスピリチュアルで関係的な存在である。健康も病も、そして癒しも、相互依存的な関係の場のドラマとして訪れる。患者が生きる生命の場の、網目のような諸関係を調整し、生きる意欲や魂のレベルを引き上げて自ずからなる癒しが訪れるように配慮するのが、〈開放系の医療としての伝統医療〉である。

技術の有効性にとらわれている〈閉鎖系の医療〉の治療法は、エビデンスによって限定され、産業的利害が絡んで排他的になる傾向がある。自然治癒力の賦活を根幹に置く〈開放系の医療〉では、治療法は無限にある。心身のバランスを回復し、健康を増進させる働きかけは、心、魂、宇宙意識、そして骨格、神経、筋肉、皮膚、さらに家族、共同体、自然の、どの位層からでも行うことができる。道具や手段も無数である。季節の気に満ちた食べ物はもちろん薬だし、釈迦が言ったように、笑顔や優しい言葉がけが、最高の治療になり得ると考えるのが、〈伝統医療〉のあり方である。〈開放系の医療〉を標榜する鍼灸師が、もし治療法に限界や行き詰まりを感じるとしたら、自らの医療が、〈閉鎖系の医療〉の発想に浸食されているからかもしれない。その場合においても、〈伝統医療〉に還れという呪文は、効くはずである。

天人相応思想が鍼灸を生んだ

〈伝統医療としての古代鍼灸〉は、〈開放系の医療〉の一つのかたちである。それは、天地宇宙と人は、同一の生命構造を持つという、新石器時代にまでたどれる認識が、春秋戦国時代を経て秦・漢代に至り、天人相応思想という国家哲学にまで高まったときに、軌を一にして体系化された。天地と我と一体という天人感応、天人合一の信仰や天人相応という古代科学観がなければ、中国古代鍼灸はあり得なかった。中国の古代に、なぜ数千年後の今日に命脈を保つ鍼灸医療が生まれたか。それを千古の謎のようというひともあるが、解答はさほど困難ではないとわたしは考えている。

あん摩、マッサージや反応点を押す、温めるなどの自然発生的な医療は、世界中に分布している。しかし、それらの地域から鍼灸医療は誕生しなかった。唯一、中国がそれを生み出した理由は、ただ中国だけが、そうした素朴な経験を観察し、分類し、体系化する方法を持っていたからである。それは、一切の存在は気でできているという思想であり、だから相互に感応するという信仰であり、やがて天人相応観として図式化される世界観であり、気思想を気の科学にした陰陽論、五行論であった。それらは、学術、文化を貫くパラダイムとして、中国古代のあらゆる思考や技術の枠を決めたのである。

臓腑も経脈も経穴も、実験の結果や観察による裸の事実というよりも、天人相応思想の眼鏡を通して把握された哲学的事実であった。正経十二脈は、一年の月の数に合うものとして選ばれ、奇経八脈は、八紘(世界)になぞらえて設定され、経穴も一年の日数から360ないし365と称された。古代鍼灸のシステムは、人体の構造と機能、天地の構造と機能を、数術をもって合致させる壮大な宇宙論的図式によって成り立っていた。それは単なる治療技術の体系ではなく、ぎりぎりまで理性化された信仰的な体系でもあったのである。中華民国の医師、惲鉄樵(うんてっしょう)は、その著書『群経見智録』において、「『内経』全書は、皆天を言う」と言い切っている。『内経』という書物は全篇にわたって、天地人は一体で、

相互に感応していると語る。天地人が一体で相互に感応し、人間の心身に精気が満ち、滞りなく流れていけば、健康を維持できる。病は精気の滞りによるものであり、その滞りを取り除く天人感応のわざが鍼灸だと『内経』は語る、というのである。

この理解の正しさを証拠づける文章は、『内経』すなわち『素問』『靈樞』の至る所にある。そこから、一つだけ挙げてみよう。「人の天道に合するや、内に五藏有り、以って五音五色五時五味五位に応じるなり。外に六府有り、以って六律に応じ、陰陽諸経を建て、十二月、十二辰、十二節、十二経水、十二時に応ず。十二経脈は、此れ五藏六府の天道に応じるゆえなり」（『靈樞』経別篇）

（天六地五とって、天の数は六であり、地の数は五である。蔵は地の陰に合致して五であり、地を統括する五行の色体表の分類すべてに対応している。府は天の陽に合致して六であり、それは天の音楽の六旋律に対応し、陰陽それぞれの六経脈に対応する。二つを合わせた12経脈は、1年12ヶ月をはじめとする天の時間、地の空間に対応している。このように五藏六府は天の道に対応している。）

ひとのからだを、宇宙的時空に相応じる小宇宙と構想する古代鍼灸は、〈伝統医療〉の要素をたっぷりと含んでいる。天地宇宙の気が、からだの隅々まで円環しつつながれていること、一年の四季折々の気の流れに応じた養生の仕方、それぞれの季節にしてよいこととよくないこと、恬淡虚無の生き方など精神の健康の大切さ、運動や呼吸法の指示、気を養い神を守ること、死生観として理解できる誕生から死に至るプロセスの認識、季節や日月の運行に応じた刺法…などなどである。

チャングム：〈アジア型伝統医療〉の理念型

李氏朝鮮の宮廷女官の波瀾万丈の人生を描き日本でも人気を博した韓国大河ドラマ『チャングムの誓い』のシナリオには、中国で生まれたこの〈アジア型伝統医療〉の思想が、詳細に盛り込まれている。医療の現状に憤る映像作家が、約500年前の時代に仮託して描いた理想の医師や医療の姿には、あるべき〈伝統医療〉の理念型が浮き彫りにされている。『チャングムの誓い』シナリオブック全3巻（キネマ旬報社）から、目についたセリフを抜き出してみよう。

母の復讐のために女医になって宮廷に帰ろうとするチャングムに、流刑の地・済州島の医師チョン・ウンベクは言う。「医術は人を助けるものだ！ そんな怒りの心で医術を修めてはならん！ 怒りに満ちた者が鍼を持ってはならん！ 今すぐやめろ！ すぐにだ」（第30話）

再び宮廷に帰り医術修業を始めたチャングムに、指導教官シン・イクビルは語る。「医者に無知と失敗は許されない。自分だけが知っているという傲慢はそれ以上に許されるものではない。傲慢は断定を生み、医者への断定には人の命がかかっている。名医などいない。病に対して謙虚であり病の全てを知ろうとする医者…。人に対し謙虚であり人の全てを知ろうとする医者…。自然に対し謙虚であり自然の全てを知ろうとする医者…。謙虚あるのみだ」（第34話）

同じくシン・イクビルの言葉。「思い知ったと錯覚するな。人間、そう簡単には変わるものではない。聡明な者ほどなおさらそうなのだ。医者は聡明な人間ではなく、深みのある人間がやるべきだ。深みを持って」（第34話）

「天象列次分野地図だ！ これは太祖大王時代に作られた星座地図である。なぜこれを学習するのか。星の動きを知ることで季節が分かり、その年は寒気が強いのか、湿度が高いのか、暑いのが分かるからだ。また、人間は自然界の一部であるゆえ、病もまた自然界の中でとらえなければならないからである！」（第33話）

天において風と名付けられる気は、ひとにおいては呼吸である。いずれも生命の源であり、風が農耕の実りを保証するように、呼吸も人体の生命力を保証する。呼吸を整えるのが、養生の最も基本だという考え方は、天人相応思想から導かれる。やはりシン・イクビル教官。「息を吐きながら十歩以上歩き、息を吸いながら五歩以上歩くのだ。医者は自身を養生する術を知り、養生法を発展させ人々に広めねば

ならない。胸で呼吸すると肺が動かないと言ったはずだ。丹田で呼吸してこそ体内の邪気が抜け出すのだ」(第33話)

女医採用の口頭試問において、試験官は「孟子が魏国の恵王に拝謁した時の言葉を言いなさい」と問う。チャングムは答える。「恵王が『先生は千里の道をはるばるお越し下さった。わが国に利益を与えて下さるのか』と言いますと、孟子は『陛下、どうしてそう利益、利益と口にされるのですか。大事なものはただ仁義だけです』と答えました」(第34話)

ドラマも完結に近く、映像作家は、〈伝統医療〉の本質について視聴者に自覚をうながすメッセージを発している。猖獗を極める痘瘡の流行を前にして、なすすべもなかったチャングムも、身を挺して患者の病状の観察を続けるうちに、熱、発疹、水腫れ、膿、かさぶたという過程を、きちんとたどった子どもが完治したことに気付く。「じゃあ、痘瘡はそのまま病を辿ったほうが治るってこと？」こうしてチャングムたちは、膿を押さえるのではなく、出し切る薬方の開発に成功する。

チャングムの述懐である。「これまでの痘瘡の治療法は、熱を下げたり、発疹が現れたら発疹を抑え、水膨れが出てきたらそれも抑えることでした。私は逆に熱がでたらその熱で発汗をうながし、発疹が現れたらどんどん出るようにし、水疱も膿もそうしただけです」(第51話)

気の思想に貫かれた一貫性、統合性

『チャングムの誓い』のセリフの意味を振り返ってみよう。まず、医師の人格の理想像として語られている、「慈愛の心を持ち、すべてに謙虚で、深みのある人間」だが、これ自体は今では空疎で偽善的なお題目に過ぎないのかもしれない。しかし、その意味は、望診や脈診のわざと関連させるとはっきりする。五行の色体表に従った望診や二十四脈の脈状を察知する脈診は、何をしているかという、気を読み取っているのである。気の最も精微なる段階は精と名付けられているが、この微細なる精気の状態を、言葉以前の素速さで読み取るには、どんな人格が求められているか。読み取るのは、技術によってというよりも、技術を入れる肉体の人格によってである。

あるかの如き、なきかの如き、微細に流動する精気の現れを察知するには、知識に偏せず、感情に流れず、決断する勇気とともに固定観念を排する謙虚さと、生命の不可知性への愛と畏れを抱く、深い人格がふさわしい。つまり、「慈愛の心を持ち、すべてに謙虚で、深みのある人間」は、道徳律というよりも、鍼灸という気の医療において、よりよい医師、鍼灸師となるための技術的要請と読み取れるのである。

鍼灸が気の医療であることは、シン・イクビル医師が教えるカリキュラムが、いっそう浮き彫りにしている。星座を学び、星の動きから季節を知り、その年の寒暖を予知し、自然界の変転と病、健康の関係を理解する。それができるのは、天地も宇宙も人間も、同じく気によって構成され、すべてが一気の運動の中にあるからだ。呼吸法も、季節ごとの食べ物に配慮することも、同じく気を取り入れる養生法である。

そして、中国古代の思想書『孟子』から、「ひとはどう生きるべきか」の命題に対する答えを学ぶのも、気の思想とリンクしている。孟子は、人のからだに発し宇宙全体に広がる「浩然の気」という気宇壮大なイメージを描き、それを養いながら愛と正義を貫いて生きよと唱えた気の思想家だった。気を操作する鍼灸師が、孟子の思想をよりどころにするのは、的外れではない。

つまり、チャングムが修業した〈中国発の伝統医療〉としての韓医学は、診断・治療技術から運動・呼吸・食べ物の養生論、精神的な修養から患者、鍼灸師としての生き方まで、すべてがそろっていて、気の思想によってひとつならに貫かれた一貫性、統合性の下にある。それが、原理的な〈アジア型伝統医療〉のあり方であり、伝統鍼灸の姿である。世界のすべては気で成り立っているから気の思想はすべてを包含し、すべてを包含するから気の思想である。産むこと・生まれること、呼吸の仕方、食べ物の取り方、四季の過ごし方、生殖も老化も死も、気の医療としての鍼灸の対象である。〈伝統医療とし

ての鍼灸)の治療家は、人生の生老病死のあらゆる段階に対応できるわざと知恵を携えたホリスティックな医師なのである。

古代鍼灸を原型として確定する意味

このような理想の〈伝統医療〉は、もはやそのままの形では存在しない。近代の社会変容は、あらゆる前近代の価値を解体したが、〈伝統医療〉についても同様である。基盤としての生活共同体は消滅し、個人主義が基調となり、人々をつなぐ絆が産業のネットワークとなれば、医療も変わらざるを得ない。それに加え、鍼灸医療固有の動因もある。〈伝統医療としての古代鍼灸〉が秦・漢代に成立したそのときから、すでに〈閉鎖系の医療〉に向かう要素を内在させていたとわたしは考えている。述べてきたように、古代鍼灸は、天人相応観という強力な宇宙論的世界図式と経験的技術の婚姻から生まれた嫡子である。やがて治療効果を求めて技術的要素が自立を始め、宇宙論的図式の囲みを破って離床するのが、この結婚の運命だった。そこには、「治しているのはわたしだ」という医師集団の技術至上主義の精神が働いていただろう。より本質的には、〈伝統医療〉の素朴さに眠り続けるには、鍼灸医療は、あまりにも高度な中国文明の達成だったからである。

鍼灸医療が、〈伝統医療〉としての性格を変えていくこの過程を理解するには、天人相応のパラダイムが産んだ〈伝統医療としての古代鍼灸〉を、原型として確定しておくことが必要である。原型が確定できると、その後の段階的、歴史的変化が理解できる。そして、「原型論」「段階論」との比較によって、現状の鍼灸がなぜこうなのか、その意味と価値、限界を照らし出すことができる。現在の古典研究には、この原型としての古代鍼灸という発想が乏しいために、鍼灸医療形成時に作用した天人相応思想の決定的な哲学的価値を過小評価しているとわたしには思える。そのために、現状の鍼灸臨床に役立てるための技術的側面に焦点を当てた研究になる傾向があり、〈古代鍼灸に宿る総合的でホリスティックな伝統医療の思想〉に還ることを通して現代鍼灸の部分性を超え、鍼灸医療を未来医学として羽ばたかせる創造的な作業が少ないという気がする。古典研究にも、〈伝統医療〉回帰が必要だと思うのである。

いま鍼灸医療が技術論的に特化して、やせ細ってきたという直感は、多くの鍼灸師が感じているのではないか。古代の原型としての鍼灸は、宇宙意識にまで開かれた〈開放系の医療〉であったし、そうであるしかなかった。時代が経るとともに宇宙論的世界図式と技術的要素が離婚し、技術が独自に展開しはじめ、やがて現代では、現代医療をモデルとして、肌の内側にのみ意識を向けた〈閉鎖系の医療〉に縮小つつある。それを修正すべく、新たな〈開放系の医療としての鍼灸〉を求めるさまざまな動きが存在している。社会鍼灸学研究会の活動も、そう位置づけることができるとわたしは考えている。

世界の再魔術化という課題

歴史の時間軸を逆にたどる学問動向が見られるのは、鍼灸学だけではない。文化人類学は、近代社会の価値観を未開社会の論理によって相対化しようとしてきたし、社会学においても、80年代以降、世界の再魔術化という視点が語られるようになった。西欧の近代学問は、中世の魔術的世界のまどろみから人々を覚醒させ、近代社会を牽引する役割を果たしてきた。しかし、マックス・ウェーバー言うところの「合理化」が社会的絆をずたずたに分断するに及んで、宗教や慣習、伝統などの非合理性の中に合理性を見いだす世界の再魔術化という課題が認識されるようになった。わたしが、日本鍼灸学にとって何が必要かを提案するこの評論で、〈伝統医療〉という呪文を唱えようとして書き出したのも、合理化の波にさらされている現代鍼灸を、再魔術化したいからである。

では、現代医療を補完する技術の一つにまで零落しつつある鍼灸が、再びトータルな〈開放系の医療〉に還るためには、どうすべきか。そぎ落としてきたさまざまな〈伝統医療〉の要素を、心理学、カウンセリング、医療面接、人類学、歴史学、古典学、気思想と、現代の諸学問のなかに見つけ、やせ細っ

た自己の身体を飾る衣装のように付け足せば、それで擬似的にであれ〈開放系の医療〉や〈開放系の鍼灸〉になれるのだろうか。それは学際的研究という方法とも関係している。

諸々の学問がパラダイムの垣根を越えて交流し新たな成果を生み出そうとする学際的方法は、第二次大戦後の欧米のノマド（遊牧民）的感覚の学者たちによって提唱され、成果を生み出してきた。日本でも、80年代には学問の行き詰まりを打開する切り札のように語られたが、定住農耕民的な縄張り意識が旺盛なわが国の学問風土では、有効に機能してきたとは言えない。真に諸学の対話が成り立たつためには、ジャンル横断的な感性とともに、共通の基盤と目的意識がなければならない。学際的な研究は、構造的な研究を前提にする必要がある。鍼灸の場合、あらゆる研究が基礎に置き、他の研究との共通の土台にすべきものは、〈鍼灸は伝統医療である〉という認識だと言いたいのである。古典や古代思想、文献研究や学術、技術、臨床、基礎医学、先端科学的研究など、すべての学問の基盤には、〈伝統医療としての鍼灸学〉がなくてはならない。重要なのは、諸学をバラバラに並列することではなく、体系の核やベースを何にするかという鍼灸学の重層的、構造的把握である。

（注）これまでに公表された鍼灸学のあるべき構造についての提言には、九州国際大学教授、石田秀実氏による「伝統鍼灸大学構想」（2002年の日本伝統鍼灸学会第30回学術大会特別講演「気思想と科学とはどのような関係にあるか」）と北里大学東洋医学総合研究所客員研究員、浦山きか氏による「〈汎・鍼灸学〉構想」（2005年2月刊の『経絡治療誌』160号）がある。

近代学校教育はいかに成立したか

教育学と鍼灸学との関連を取り上げて、具体的に説明を続けよう。ここでも、日本は変な国だということから始めなければならない。どこの国でも、子どもにどうやって勉強させるか、教室での教え方、導き方など、ハウツウの教育学は盛んである。だが、ほとんどそれしかなくて、人間にとって教育とは何か、なぜ教育はうまくいかないか、教育は成立可能なのか、といったよりメタなテーマについて追究する哲学的、社会学的、歴史学的な教育学が不人気なのは、日本だけである。欧米では、教育社会学というと、まず批判的社会学である。子どもは本来、好奇心にあふれ、遊び、学ぶことを好む存在である。その子どもが、学校に行くことによって勉強嫌いになり、遊びから離脱し、社会的に落ちこぼれるのはなぜなのか。そういう問題意識に立った批判的社会学は、学校教育の成立史を前近代の社会までたどり直すことで、さまざまな研究成果をもたらしてきた。

前近代においては、専門的な学者、宗教者になるコースを除き、教育のほとんどは生活の中に埋め込まれていた。生活に必要な知恵や技術は、父母や他の大人、親方などから、生活の場、労働の場において伝授された。生活も学ぶことも遊ぶことも労働も一体で、知恵や技術は教える者の人格を通し、生活の必要と楽しみのために、人生の一コマとして伝えられた。いっぽう、近代の学校教育は、富国強兵を企図する国家による人為的な強制的政策である。明治期の反乱を描いたアメリカ映画「ラストサムライ」で、日本近代史の裏面に通じる監督は、国家官僚にひと言、「学校を作れ」と叫ばせる印象的な場面を挿入している。

近代の産業革命期に、子どもたちは、共同体から引きはがされて決まった場所に集められ、個別に国家資格を有する専門家の管理にゆだねられる。そこで与えられる知識は、国語、算数、理科、歴史、道徳、音楽、体操…と相互に脈絡のない分断された教科であり、競争を通じて勤勉で従順な労働者、兵士、主婦…に特化された能力が形成される。近代学校は、人間の能力を国家と社会の必要に見合った形で部分化し一面的に養成し、各階層に分配する装置である。

そのような管理的な本質を持つ学校で、子どもたちが失敗し、脱落し、反抗し、無気力になるのは当たり前である。教育は、人間の可能性を全面的に開花させ、個人と共同体の幸福を実現すると宣言しているが、そのような教育は、近代学校において原理的に成立不能だと教育社会学は分析する。この近代

学校の性格を宗教界は誤解していたようだ。宗教は人間の神や仏と交流し融合する能力を高め、現世の価値観を超越して他者の救済を願う共同的、統合的人格の陶冶を目指すものである。共同体から引きはがされた個人の、知的、合理的な能力を競争を通して磨き上げ、国家への忠誠を誓わせる近代学校システムとは、根本的に矛盾している。明治以降、キリスト教に倣って仏教諸派も、ことごとく教団立学校を設立した。幼稚園から大学まで一貫する教育体制を整えた諸々の教団が、それによって信仰の内実を豊かにし、悟りを得た人物を次々に輩出したという話は聞いたことがない。

鍼灸学校に絶望した後で

宗教界の勘違いに言及したのは、それと同じことが、鍼灸教育についても言えると思うからである。何度ものべてきたように、〈伝統医療としての鍼灸〉の本質は、総合的、ホリスティックなことである。だが、現在の鍼灸教育は、個別分断主義の近代学校の形式を無批判に踏襲している。この状況は、受け入れるしかない近代の運命だが、そこで、最初に問われるべきは、いかに教育すべきか、よりよい教育をどうするかという技術主義的な乗り越えではないだろう。それは、熱心で良心的な金八先生を、燃え尽き症候群に追いやる道である。

鍼灸教育の無残な現状には、歴史的な理由がある。欧米の教育社会学が、近代教育とは何かを知るために、前近代の生活が育てていた生活と密着した伝承の形を回顧したように、わたしたちも、鍼灸学校に絶望した後何ができるかを知るために、前近代の〈伝統医療としての鍼灸〉の思想とわざの伝承の仕方を回顧すべきだと思う。徒弟制の意味と価値、その欠陥、そこで伝えられたもの、そこでは育めなかったもの。それらを知ろうとしなければ、わたしたちは鍼灸を愛している、鍼灸の伝統、歴史の恩恵に感謝しているなどは、とても言えない。

〈伝統医療としての鍼灸〉の伝承という視覚から、鍼灸学校、大学のカリキュラムを捉え直してみると、無数の足りないもの、よけいなもの、ちぐはぐなものが露呈してくる。鍼灸学校の中でも伝えることが可能なもの、絶対にできないもの、学校の外でしたほうがよいもの、自主的な研究・修業集団の在り方、なども見えてくる。文科省に〈鍼灸は伝統医療である〉という発想が皆無であり、その保存や伝承などまったく考えていないこと、恐らく50年後に反省したときには、もはや取り返しがつかないだろうことも分かってくるし、国家試験の内容のおかしさも具体的に指摘できるようになるだろう。そんなことを知ったからといって、苦しさが増すばかりで、現状は変えようがないという意見もあるかもしれない。しかし、〈伝統医療〉の伝承者としての誇りを抱くことによって、おかしいことはおかしいと語る勇氣は湧いてくるだろう。〈伝統医療〉回帰は、鍼灸教育を少しづつでも変える道筋になると思うのである。

(注) 鍼灸学校のカリキュラムをからだ作りをベースに組み替えるべきだという議論は、拙論「天と地が交わり、人が生まれる 鍼灸師のからだをいかに作るか」(『医道の日本』2004年3月号)を参照。

鍼灸師の人格の分裂を防ぐために

古代鍼灸は天地と一体になる医療だった。天の気と地の気とひとの気を、鍼と灸を媒介に繋ぐ医療だった。そういう意味の〈気の伝統医療〉だった。鍼灸師は行き詰ったときには、原型としての古代鍼灸に還ればいいとわたしは思う。そして古典から、中国医学の歴史から、中国医学を継承した日本鍼灸のわざと思想から、新たな活力を得て前に進めばいい。いま鍼灸医療という領域は、中心軸を喪失してばらばらに散乱しているかのようである。職種は、開業鍼灸師、出張専門鍼灸師、柔道整骨院勤務、整形外科勤務、病院勤務、ホスピスケアなどなどに広がっている。スポーツ鍼灸、美容鍼灸など各科鍼灸も目立つようになった。現代医療との接点が増すことは、学ばなければならない技能、求められる知識が増えることを意味している。生態病理学や緊急性の鑑別法、心理療法やスピリチュアルな療法などが必要だという声も聞こえてくる。かつては、技術上の流派、会派の違いが鍼灸師の交流の阻害要因だった

が、それに加えて職種や治療対象および関連する知識の違いが、鍼灸師コミュニティを複雑に分断している。

しかし、個々の鍼灸師が、〈伝統医療としての鍼灸医療〉の内側にしっかりと足場を持っていれば、コミュニティの分裂状況は回避できるだろう。そこは、わたしたちが鍼灸師として、人間として生きるために必要な技術と思想が原理的に整っている場所である。それが鍼灸の中になので、医療面接、スピリチュアルケア、死生学、心理療法などを外から、(ということは西洋医学からということになるが)学ぶという学び方では、わたしたちの鍼灸師としての人格は分裂してしまう。生活と医療とスピリチュアルな希求を切り離さない〈伝統医療としての鍼灸〉には、原初的な萌芽であったとしても、それらの要素は含まれているのである。先人たちの知恵と洞察の素晴らしさに感動しつつ、それを現代的な知識で深めていくのが、伝統を継承する実り多い方法だといえるだろう。鍼灸師が思想の根拠地を持たず、精神が東と西に、過去に現在にと、バラバラに分裂し、統合性を失調してしまえば、患者さんを癒すところではない。〈伝統医療〉を貫く気思想の一貫性がわたしたちの精神の分裂を防ぎ、統合性を支えてくれる。(その「気思想」がどのように日本的な変容をとげたかは、考えるべきテーマである)

気によって統合されたこの宇宙を分断し合理化するテクノロジー文明は、鍼灸界にもどんどん浸透している。わたしたちが、鍼灸も食べ方も心身の養生も天地宇宙とともに生きる生き方も、すべてを一体として統合する、ホリスティックな鍼灸師たらんとするとき、唱えるべきは、〈鍼灸は、アジアの伝統医療である〉という呪文だと思うのである。(2009.4.4)